

大学生は社会をどのように捉えているのか

TAZAWA, Minoru / 田澤, 実

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

2021-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024312>

大学生は社会をどのように捉えているのか

法政大学キャリアデザイン学部 教授 田澤 実

1 問題と目的

本研究の目的は、大学生が社会をどのように捉えているのかについて明らかにすることである。

白井（2008）および白井・安達・若松・下村・川崎（2009）は、23歳から39歳までの男女を対象に「私にとって社会は」という文章完成法を用いた調査を行った。これは、社会について人々への信頼という側面のみを測定するのではなく、「規範も含めた社会を大枠で捉える（白井ら、2009 p229）」ものであった。

白井（2008）は、性別や非正規経験の有無により若年者が社会をどのように捉えているのかが異なることを明らかにした。具体的には、男性は「実現」といった達成指向、女性は「厳しい」など否定的評価および「学ぶ」など自己の肯定的変化との関連で社会を捉えており、非正規経験のない男性は非正規経験のある男性よりも「稼ぐ」といった経済的な意味で社会を捉えていることを明らかにした。

また、白井ら（2009）は、社会について肯定または否定という一次元で捉えた。具体的には、社会に対する積極的なかわり、自分を支えてくれる基盤としての社会が明確に示される場合を「肯定」（記述例：「自己実現の場」「家族を守ってくれるもの」）、社会に対して否定的だったり、無関心であったりする場合を「否定」（記述例：「敵」「厳しい」）、否定ではないが肯定ともいえない場合、否定・肯定の拮抗が示される場合を「中位」（記述例：「職場」「甘

辛い』)と分類した。

本研究では、大学生を対象にして結果を比較検討する。

2 方法

(1) 対象者

就職情報サイトのモニターである全国の大学3年生4,314名であった。分析には以降の質問項目にすべて回答した3,102名(男性:927名、女性:2,175名)のデータを用いた。文理区分を対象者自身による判断で求めたところ、文系が2,269名、理系が833名であった。また、対象者が通った高校所在地を基準にして、三大都市圏(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、愛知県、岐阜県、三重県、大阪府、兵庫県、京都府、奈良県)と地方圏に分類したところ、三大都市圏が1,799名、地方圏が1,303名であった。なお、モニターの会員規約には、回答を「大学や研究機関と実施する共同調査」に利用する旨を記載してある。

(2) 調査時期

2019年11月から12月であった。

(3) 用いた質問項目

白井(2008)および白井ら(2009)と同様に「私にとって社会は」という文章を完成させるように求めた。

3 結果と考察

分析には、計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア「KH Coder」(樋口, 2004)を利用した。

(1) 語のクリーニング

分析を行う前に、漢字とひらがなが混在している語はどちらかに統一するように語のクリーニングを行った。たとえば、「つながり」と「繋がり」の両方がみられた場合、「繋がり」に統一した。なお、「生き辛い」と「辛い」の

語については、本文中での使われ方を確認し、後者がすべて「つらい」と読むと判断できたため、それぞれを「生きづらい」と「辛い」として統一し、両者を分けて分析した。

(2) 分析の方針

本研究では、テキスト型データの計量的分析について統合アプローチを提案した樋口（2004）を参考にして、多変量解析によってデータ全体を要約・提示した上で、コーディング規則を公開する手順を踏むことにした。

樋口（2004）は、従来、テキスト型データを計量的に分析する方法には、Dictionary-basedアプローチとCorrelationalアプローチのいずれかが用いられることが多かったことを指摘した。そして、前者には、分析者の理論や問題意識を自由に操作化し、データの様々な側面に自由に焦点を絞ることができるという利点がある一方で、都合の良いコーディング規則ばかりが作成・利用されてしまう危険性があり、後者には、分析者の持つ理論や問題意識の影響を極力受けない形でデータを要約・提示できるという利点がある一方で、多変量解析に大きく依存しており、理論や問題意識を自由に操作化して追究する上では限界があることを指摘した。そこで、樋口（2004）は、これらの2つのアプローチを互いに補い合う形で統合することを提案した。

(3) 多変量解析によるデータ概要の把握

分析の第一段階として、データ中にどのような内容の記述が多くみられたのかについて概観するために多変量解析を試みた。

まず、準備段階として、データ中に多く出現していた語を抽出した。助詞や助動詞のようにどのような文の中にでも出現する一般的な語を省き、データの内容をあらわすような語に注目した。出現回数が最も多かったのは「場所」（619回）であった。上位100語を目安にしたところ、出現回数が12回の語までを採用して上位102語となった。

これらの102語を用いて、非計量的多次元尺度構成法（Kruskal）による分析を行った（図1）。分析結果の解釈のしやすさなどを考慮し、クラスター数を8とした。以下には、頻出の102語について、全体の出現回数の順に示すの

ではなく、クラスターごとの出現回数の順に示す（表1）。なお、活用のある語は、基本形に直して取り出しているが、テキストに含まれる否定表現は独立して抽出した。その結果、「生きる」は肯定表現と否定表現がともに上位102語に含まれたため、前者を「生きる」（記述例：「生きていく」「生きられる」）と表記し、後者を「生きる（否定）」（記述例：「生きにくい」「生きづらい」）と表記した。また、「分かる」は否定表現のみが上位102語に含まれたため、「分かる（否定）」（記述例：「分からない」「分かりません」）と表記した。

クラスター1は、次元1においても、次元2においても、およそ中心に位置し、「場所」（619回）、「自分」（440回）など、出現回数の多い語が集まっていた。どのような語とも一緒に使われうる語が集まっていると解釈できる。

クラスター2、クラスター3、クラスター8は、およそ次元1の負の方向に位置していた。クラスター2には、「厳しい」「生きる（否定）」「窮屈」「理不尽」などの語が、クラスター3には、「大変」「不安」「辛い」「苦しい」「息苦しい」などの語が、クラスター8には、「難しい」「怖い」「闇」などの語が集まっていた。

クラスター4、クラスター5、クラスター6、クラスター7は、およそ次元1の正の方向に位置していた。クラスター4には、「成長」「活躍」などの語が、クラスター5には、「協力」などの語が、クラスター6には、「学ぶ」「経験」などの語が、クラスター7には、「助け合う」「作り上げる」「共存」などの語が集まっていた。

以上より、次元1は社会に対して肯定的であるのか否定的であるのかという軸であると解釈できる。次元1において正の方向に位置していると、社会に対する積極的なかわりなどが示されていると解釈でき、負の方向に位置していると、社会に対してネガティブな感情や評価が示されていると解釈できる。

なお、同一のクラスターにおいて一部、肯定的な語と否定的な語が混在しているのが分かる。これは、否定・肯定の拮抗が示される記述（例：「辛いけど楽しいもの」）が含まれているためと解釈できる。先行研究（白井ら、2009）においては否定・肯定の拮抗が示される場合を「中位」として分類しているが、本研究では可能な限り肯定と否定を分けて捉えることにした。

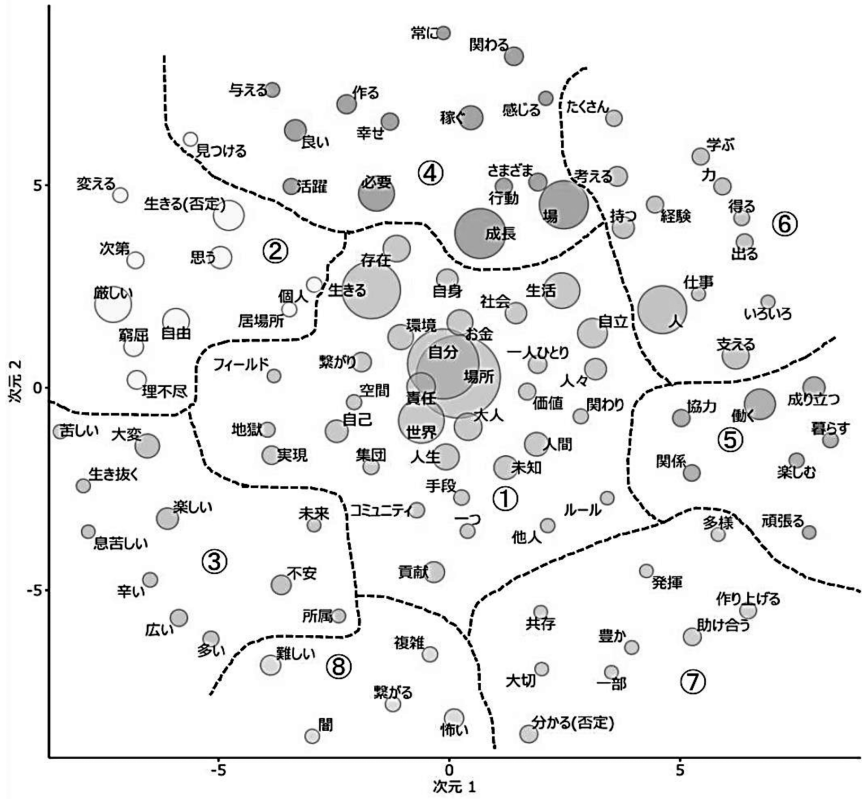


図1 非計量的多次元尺度構成法 (Kruskal) の結果

注) クラスタ分類を示す点線とクラスタ番号に対応する丸数字を施した

表1 クラスターごとの頻出語の頻度

クラスター1	クラスター2	クラスター4	クラスター6
場所 619	厳しい 108	成長 220	人 200
自分 440	生きる(否定) 74	場 203	支える 57
生きる 291	自由 55	必要 105	持つ 37
世界 175	思う 38	稼ぐ 46	考える 30
生活 108	窮屈 28	良い 36	学ぶ 21
自立 71	理不尽 26	作る 28	経験 21
責任 64	次第 20	関わる 26	力 21
大人 61	個人 16	さまざま 24	出る 20
存在 58	居場所 15	幸せ 22	たくさん 19
人生 55	変える 15	行動 21	得る 17
お金 52	見つける 13	活躍 19	いろいろ 13
環境 51		与える 15	仕事 13
人間 45	クラスター3	感じる 14	
未知 44	大変 46	常に 12	クラスター7
自己 40	楽しい 36		助け合う 23
人々 36	不安 29	クラスター5	分かる(否定) 23
自身 35	広い 21	働く 78	作り上げる 20
社会 35	多い 18	成り立つ 37	多様 13
貢献 34	辛い 15	協力 22	豊か 13
実現 26	苦しい 14	関係 20	一部 12
一人ひとり 25	所属 13	暮らす 17	共存 12
価値 21	生き抜く 13	楽しむ 16	大切 12
集団 18	息苦しい 12	頑張る 12	発揮 12
コミュニティ 17	未来 12		クラスター8
手段 17			難しい 30
関わり 16			繋がり 29
空間 16			怖い 27
地獄 16			繋がる 16
一つ 15			複雑 16
他人 14			闇 14
フィールド 12			
ルール 12			

(4) コーディングの枠組み

分析の第二段階として、より詳細な分析を行うために、関連する単語同士を同じコードに分類するコーディングの作業を行った。なお、KH Coderによるコーディングは回答の中から要素を抽出するという考え方であるため、1つの回答であっても、複数のルールに合致すれば、複数のコードが与えられている（川端・樋口，2003）。

コーディングルールは、これまでの分析結果と、20代から30代の大学卒者を対象に同様の指示で行った先行研究（白井，2008；白井ら，2009）を参考にした。データ中に多く出現していた102語について、語の本文中での使われ方を確認しながら、その語が含まれている場合に、主に「肯定」を示すと判断

できる語、主に「中位」を示すと判断できる語、主に「否定」を示すと判断できる語を抽出した。どのような語とも一緒に使われうる語については抽出しなかった。

作成した12のコード名、各コードに用いられた語、その頻度等を表2に示す。なお、コード名は白井（2008）に同様のものがあつた場合には、そのコード名を用いることにした。また、太字の語は白井（2008）でも頻出であつたことを、カッコ内の語は本研究で記述はみられたものの、頻出の102語には含まれなかったことを示す。以下、分類は【】、コード名は『』、用いられた語および記述例は「」を使って表記し、記述例で該当する語は傍点を記す。

表2 コーディング名および用いられた語の頻度等

分類	コード名	用いられた語	頻度	割合
肯定	成長	成長, 実現, 活躍, 発揮	273	8.80%
		協力, 助け合う, 作り上げる, 共存, 貢献	107	3.45%
		繋がり, 繋がる, 関わり, 関わる	85	2.74%
		学ぶ, 学び, 経験, (勉強)	52	1.68%
中位	職場	働く, 仕事, (職場)	91	2.93%
		稼ぐ, 稼ぎ, お金, (収入), (給料)	70	2.26%
		ルール, (秩序), (規則)	16	0.52%
否定	厳しい	厳しい, 窮屈, 理不尽	161	5.19%
	辛い	辛い, 大変, 不安, 苦しい, 息苦しい, 地獄	131	4.22%
	生きにくい	生きにくい, 生きにくさ, 生きづらい	74	2.39%
	難しい	難しい, 怖い, 闇	71	2.29%
	分からない	分からない, 分かりません, 未知	67	2.16%

注) 太字は先行研究（白井，2008）で用いられた語、カッコ内は本研究で出現回数が12回未満であつた語を示す。

① 肯定に分類されたコード

【肯定】に分類されたコードは『成長』『協力』『繋がり』『学ぶ』であつた。これらのコードは主に社会に対する積極的なかわり方を示していると判断した。

『成長』のコードで用いられた4語の記述例をみると、「より成長できる場」「好きを実現できる場」「自分の存在を活躍させる場所」「自分を発揮できる場所」であつた。

『協力』のコードで用いられた5語の記述例をみると、「一人ひとりが協力する世界」「みんなで助け合うもの」「共に作り上げるもの」「人と人が共存できる場所」「人に貢献していく場所である」であつた。

『繋がり』のコードで用いられた4語の記述例をみると、「人と繋がりを持つ場」「人と繋がるために必要である」「人との関わりである」「世の中と私との関わる場所である」などであった。

『学ぶ』のコードで用いられた4語の記述例をみると、「生きる知恵を学ぶところ」「学びの場である」「いろいろ経験できる場所」「勉強の場である」であった。

② 中位に分類されたコード

【中位】に分類されたコードは『職場』『稼ぐ』『ルール』であった。これらの3つのコードは主に否定ではないが肯定ともいえないと判断した。

『職場』のコードで用いられた3語の記述例をみると、「働く場所である」「仕事をしている大人達のこと」「職場である」であった。

『稼ぐ』のコードで用いられた5語の記述例をみると、「稼ぐ場所」「稼ぎの場」「お金を得るために頑張る場所」「収入を得る手段」「働いて給料を貰う場所」であった。

『ルール』のコードで用いられた3語の記述例をみると、「ルールを守るところ」「秩序ある集団」「規則だ」であった。

③ 否定に分類されたコード

【否定】に分類されたコードは『厳しい』『辛い』『生きにくい』『難しい』『分からない』であった。これらのコードは社会に対して否定的だったり、無関心であったりすると判断した。

『厳しい』のコードで用いられた3語の記述例をみると、「とても厳しい場所」「窮屈な空間である」「理不尽の連続」であった。

『辛い』のコードで用いられた6語の記述例をみると、「辛い世界」「大変な場所」「不安だらけの世界である」「苦しいものである」「息苦しいものです」「学生生活が終わった後の地獄」であった。

『生きにくい』のコードで用いられた3語の記述例をみると、「とても生きにくいものである」「生きにくさがある」「生きづらいつと感じる」であった。

『難しい』のコードで用いられた3語の記述例をみると、「とても難しい

ものである」「非常に怖いところ」「闇が深い」であった。

『分からない』のコードで用いられた3語の記述例をみると、「よく分からない世界」「分かりません」「まだ想像もつかない未知の場所」でした。なお、白井（2008）では「何だろう」がコーディングルールに含まれていたが、本研究では同様の語の記述が含まれていなかったため省くことにした。

（5）属性による違い

コードと属性のクロス集計を求め、 χ^2 検定を行った（表3）。性別は人数の偏りが有意であり（ $\chi^2[11]=35.29, p<.01$ ）、エリアは人数の偏りが有意傾向であった（ $\chi^2[11]=19.45, p<.10$ ）。文理区分においては、このような結果はみられなかった。残差分析の結果を解釈すると「協力」と「稼ぐ」は男性に多く、「学ぶ」と「生きにくい」は女性に多かった。本研究では、未入職者である大学生においても白井（2008）と類似した傾向があることを確認した。また、「繋がり」は三大都市圏に多く、「生きにくい」は地方圏に多かった。本研究では、地方圏を地元とする女子学生が社会を生きにくさの観点から捉えていることに特徴があることを示した。

表3 コードと属性のクロス集計

	性別		エリア		文理区分	
	男性 n=927	女性 n=2,175	三大都市圏 n=1,799	地方圏 n=1,303	文系 n=2,269	理系 n=833
成長	83 (1.31)	190 (-1.31)	158 (0.23)	115 (-0.23)	204	69
協力	40 (2.46)*	67 (-2.46)*	59 (-0.47)	48 (0.47)	82	25
繋がり	20 (-0.81)	65 (0.81)	59 (2.35)*	26 (-2.35)*	63	22
学ぶ	8 (-1.97)*	44 (1.97)*	32 (0.64)	20 (-0.64)	34	18
職場	28 (0.77)	63 (-0.77)	51 (-0.24)	40 (0.24)	68	23
稼ぐ	28 (2.46)*	42 (-2.46)*	41 (0.23)	29 (-0.23)	44	26
ルール	7 (1.49)	9 (-1.49)	12 (1.44)	4 (-1.44)	14	2
厳しい	36 (-1.51)	125 (1.51)	102 (1.68)	59 (-1.68)	121	40
辛い	32 (-0.78)	99 (0.78)	70 (-0.94)	61 (0.94)	95	36
生きにくい	11 (-2.48)*	63 (2.48)*	32 (-2.52)*	42 (2.52)*	59	15
難しい	13 (-1.75)	58 (1.75)	36 (-1.15)	35 (1.15)	54	17
分からない	21 (0.77)	46 (-0.77)	34 (-1.11)	33 (1.11)	49	18

* $p<.05$

注1) 性別とエリアは人数の偏りがあるまたは有意傾向であったため残差分析を行い、調整された残差をカッコ内に示した

注2) 残差分析がプラスに有意であったセルの度数に網掛けを施した

4 総合考察

(1) 本研究のまとめ

本研究の目的は、大学生が社会をどのように捉えているのかについて明らかにすることであった。「私にとって社会は」という文章完成法を用いて、大学生の回答について、多変量解析とコーディングの作業を行った。

まず、白井ら（2009）と同様に、肯定か否定かという一次元で社会を捉えた。そして、4つのコードを「肯定」に、5つのコードを「否定」に、3つのコードを「中位」に分類し、合計で12のコードを作成した。すなわち、大学生の社会の捉え方が12種類あることを示した。

(2) 先行研究と本研究の対応関係

以下には、23歳から39歳までの若年者を対象にした白井（2008）の結果と、

大学生を対象にした本研究の結果の対応関係を示す（表4）。

表4 本研究と先行研究の対応関係

分類	本研究	白井（2008）
肯定	成長 協力 繋がり 学ぶ	成長／実現 つなぐ 学ぶ
中位	職場 稼ぐ ルール	職場 稼ぐ ルール
否定	厳しい 辛い 生きにくい 難しい 分からない	厳しい つらい (生きる) 家族 生活 自分 遠い

注）白井(2008)は肯定表現も否定表現も合わせてカウントしているため、「生きる」のコードが部分的に本研究の「生きにくい」に該当すると判断した

① 肯定を示すコード

本研究で「肯定」に分類されたのは「成長」「協力」「繋がり」「学ぶ」の4つのコードであった。

「成長」については、白井（2008）で「成長」と「実現」を分けていたが、本研究では、本文での使われ方も確認したうえで、同一のコードとして分類が可能であると判断した。

「繋がり」および「学ぶ」については、白井（2008）と同様の結果と判断できた。

「協力」については、白井（2008）においてはみられなかったコードであった。「協力」は、23歳から39歳までの若年者では多くはみられないものの、大学生においては多くみられる社会の捉え方である可能性がある。上述してきたように、「成長」のコードの記述例は、「より成長できる場」「好きを実現できる場」「自分の存在を活躍させる場所」「自分を発揮できるところ」などがあった。また、「協力」のコードの記述例は、「一人ひとりが協力する世界」「みんなで助け合っていくことである」「共に作り上げるもの」「人と人が共存できる場所」「人に貢献していく場所である」などがあった。この両者を比較すると、どちらも社会に対する積極的なかわりを示す点では共通しているものの、

「成長」は自己の肯定的な変化および自己充実、すなわち、主語が自分一人であることを指し示すことが多いのに対して、「協力」は、主語が自分だけではなく他者も含まれていることが多いと解釈できる。大学生を対象にした本研究において「協力」のコードがあらわれたことは、学生が社会を作り出す主体であると認識していることを示しているといえよう。

② 中位を示すコード

本研究で「中位」に分類されたのは「職場」「稼ぐ」「ルール」であった。これらはすべて白井（2008）においてもみられたコードであった。

③ 否定を示すコード

本研究で「否定」に分類されたのは「厳しい」「辛い」「生きにくい」「難しい」「分からない」であった。

「厳しい」「辛い」「分からない」は白井（2008）においてもみられたコードであった。それに対して、「生きにくい」「難しい」は大学生において多くみられる社会の捉え方である可能性がある。

ただし、本研究では、テキストに含まれる否定表現は独立して抽出したが、白井（2008）における分析は肯定表現も否定表現も合わせてカウントした（例：「厳しい」のコードには「厳しくない」とされている場合もカウント）。よって、「生きにくい」については、分析方法を変えれば23歳から39歳までの若年者においてもみられる社会の捉え方である可能性がある。

また、「難しい」のコードが23歳から39歳までの若年者では多くみられずに、大学生において多くみられた理由は、在学中の学生が卒業後の時点を展望した評価である可能性がある。すなわち、「難しい」は「厳しい」「辛い」と同様に社会に対する否定的な評価を示している点では共通しているものの、入職前である大学生に特徴的な社会の捉え方と解釈できるのではないだろうか。

④ 本研究では多くみられなかったコード、分類しなかったコード

最後に、白井（2008）においては多くみられたコードであるものの、本研究では多くみられなかった、または、コード分類しなかったものも確認して

おく必要があるであろう。これらには「家族」「生活」「自分」「遠い」のコードが該当した。

まず、白井（2008）において「家族」のコードに該当する単語は「家族」「家庭」「子供」「子ども」であった。これらの語は大学生を対象にした本研究では上位102語に含まれていなかった。大学生に対して過去、現在、未来の自由記述を求めた田澤・梅崎（2017）においても、現在や未来において家族的なものに関する単語はほとんどみられなかったことから、本研究では同様の結果が得られたと解釈できる。ただし、これは就職活動開始時期の大学生を対象にしたことが影響している可能性がある。異なる学年を対象にして比較検討する研究が求められるであろう。

次に、「生活」「自分」のコードについては、本研究では、どのような語とも一緒に使われうる語と判断したため抽出しなかった。

最後に、白井（2008）において「遠い」のコードに該当する単語は「遠い」「遠く」であった。これらの語も本研究では上位102語に含まれていなかった。白井（2008）は「遠い」のコードは男性よりも女性に多いこと、そして、「家に入ることで、社会からのつながりが切れる」という言説を具体例にしながら、女性にとっての社会が必ずしも自明視されているわけではないことを指摘している。大学生の場合、就職の有無や結婚の有無などのライフコースが23歳から39歳までの若年者ほどは多様化していないために、自己との距離感や間接性を示す「遠い」に該当するコードがみられなかったのかもしれない。

（3）コーディングルールを作成し、明示した意義

また、大学生は社会をどのように捉えているのかを明らかにするためにコーディングルールを作成し、明示したことも本研究の意義である。樋口（2020）が指摘するように、コーディングルールの公開は、分析の信頼性を高めるだけでなく、分析概念の汎用性を高め、その分野における研究の発展につながる。たとえば、高（2015）は、レイシズムのコーディングルールを公開したことにより、その後、高（2015）が切り開いた道をたどる後続の研究がうまれた。同様のことが本研究でも期待できる。

(4) 今後の課題

本研究は、就職情報サイトのモニターである全国の大学3年生が対象者であった。そのため、民間企業への就職を視野に入れていない者や公務員および大学院進学のみを視野に入れている者は含まれていない。また、同じ大学生であっても低学年を対象にした研究では異なる結果が得られる可能性がある。今後は異なる層の大学生を対象にした研究との比較も求められる。

引用文献

- 樋口耕一 2004「テキスト型データの計量的分析」『理論と方法』19(1), p101-115.
- 樋口耕一 2020『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して（第2版）』ナカニシヤ出版.
- 川端亮・樋口耕一 2003「インターネットに対する人々の意識：自由回答の分析から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』29, p162-181.
- 白井利明 2008「フリーターのキャリア自立に関する心理学的研究—時間的展望の視点によるキャリア発達理論の再構築—平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書」
- 白井利明・安達智子・若松養亮・下村英雄・川崎友嗣 2009「青年期から成人期にかけての社会への移行における社会的信頼の効果：シティズンシップの観点から」『発達心理学研究』20(3), p224-233.
- 高史明 2015『レイシズムを解剖する：在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房.
- 田澤実・梅崎修 2017「キャリア意識と時間的展望—全国の就職活動生を対象にした自由記述分析—」『キャリア教育研究』35(2), p47-52.

ABSTRACT

How do university students perceive the society?

Minoru TAZAWA

We investigated how university students perceive their society. Three-year university students (N=3, 102) that participated in an online survey and were requested to describe “What does society mean to me?” In Study 1, 102 words that were most often used in the collected data were analyzed using Nonmetric Multidimensional Scaling. The results indicated eight clusters and confirmed a dimension showing positive and negative perspectives. In Study 2, 102 words were encoded and 12 codes were extracted, which were classified into three types; four codes suggesting a positive perspective (“growth,” “cooperation,” “connection,” and “learning”), five codes suggesting a negative perspective (“strict,” “tough,” “hard to live,” “difficult,” and “cannot understand”), and three codes suggesting a moderate perspective (“working,” “earning,” and “rules”). In Study 3, correlations between the above 12 codes and their attributes were examined using a chi-square test. Men often used words related to “cooperation” and “earning,” whereas women often used words related to “learning” and “hard to live.” Moreover, words relevant to “connection” were often used in three major metropolitan areas, whereas words related to “hard to live” were often used in rural areas. The 12 codes that were extracted indicated that “Cooperation” was included in codes suggestive of a positive perspective, which is interpreted as university students’ recognition of themselves as the backbone of society.